

北齊・北周でも皇后の出家が行われ、南朝でも、南齊代に出家する后妃が存在したことから素地は有ったものの、皇后出家が行われなかった。このことから、隋・唐代において、皇帝が死去した後、后妃が出家するという行為は、北朝の例に倣って行われたと結論づける。他方、南朝では、皇后出家が行われなかったものの、華北の戦乱を契機に出家する者や結婚や再婚を拒んで出家する者、劉宋以降では、自ら願って仏門に入る者らがいたことを指摘する。

第二章「『比丘尼伝』の成立背景」では、南朝の尼僧を探る上で重要な史料である『比丘尼伝』の成立背景について考察する。劉宋・元嘉九年（432）に范曄によって『後漢書』に「列女伝」が立伝されるなど、儒教倫理に照らし合わせて称賛されるべき女性に関する著述がなされてきた背景から、梁代に入ると宝唱によって、仏道修行や弘道などに秀でて称賛される人物を立伝した『比丘尼伝』が編纂されるにいたる。また、尼僧教団の風紀の乱れや重受戒の問題など様々な弊害もあったことから、『比丘尼伝』には、仏法に賢明通達なる尼僧達によって正法を堅固に維持していく重要性を説くとともに、仏道修行の手本となるべき尼僧を示し、本来の尼僧の有り様を伝えようとする意図があったことも指摘する。

第三章「尼僧の活動と仏教受容」では、主に魏晉南北朝期の尼僧の活動について論じる。南北朝期の尼僧は、僧からは間違った教えに流されやすい存在として見られており、知識人からは儒教倫理から外れた存在として捉えられていた。このような批判がなされたのは、宝唱が『比丘尼伝』序文で指摘するように墮落や破戒という尼僧自身の問題や、儒・仏・道による論争が背景にあったからである。しかし、本章第三節で指摘したように、業首尼や宝賢尼らのように人々の尊崇を集めた者もあり、皇族や士人からの喜捨が絶えることが無かったことから、この批判は一部の尼僧に向けられたものであったことが分かる。東晋・劉宋代には、卜占に優れた術士や僧がおり、皇帝や士人の行動に影響を与えていたが、尼僧のなかにも、道容尼や桓温に予言した尼僧のように、卜占や齋による怪異の除去をすることによって、皇帝や士人らを仏教信仰へ向かわしめた者もいた。また、尼僧のなかには皇帝や皇后・士人から尼寺を建立されたり、喜捨を受けたりする者、死後に贊などを作成される者もいた。これらの事例から、尼僧との関わりを通して、皇族や士人が仏教に接し受容していった可能性を示唆する。

II. 論文審査結果の要旨

中国仏教史上において尼僧に関する研究は重要な分野の一つであるが、先

行する論著は少なく、研究が進んでいるとはいいがたい。これは利用できる史料が少ないことが主な原因である。本論文は中国に仏教が定着していった魏晋南北朝時代に焦点を当て、『比丘尼伝』をはじめとする仏教史料や、当該時代の正史、墓誌などを用い、尼僧に関して出家に至る動機や出家後の活動などの観点から論じ、それを仏教受容に関連づけて論じようとする意欲的な研究である。

第一章では、女性たちの出家動機について扱うが、特に北魏期の后妃について詳細に論じる。『魏書』や墓誌を利用し、歴代の后妃について網羅的に検討し、孝文帝期以降、皇后の出家が見られることを明らかにし、これが北朝では、その後も、受け継がれていくものであるとする。一方、南朝では后妃の出家は通常見られず、隋唐代における后妃の出家は、北朝の例に倣って行われたと結論付ける。ただ、この点については、唐代の后妃の出家の事例を具体的に示した上で、果たしてそれが一般的に見られるものであったのか、慎重に検討をする必要があるであろう。

第二章では、当該時代の尼僧について研究する際の基本史料でもある『比丘尼伝』を題材に、その成立の背景について考察する。結論としては、列女に関する伝記が著されるようになってきたことや、発展していくにつれて見られるようになってきた尼僧教団の風紀の乱れなどへの危機意識が『比丘尼伝』の著述につながったとする。『比丘尼伝』は史料としては利用されてきているが、その著作としての性質を考察したような論考は、これまであまり見られず、本論文独自の視点である。

第三章では、南北朝時代に起こった尼僧への批判と、皇帝や士人との関係など尼僧の活動について論じる。史料の関係もあり、考察の範囲が東晋・劉宋に偏っているが、仏教が定着していく中で尼僧の活動の場が広がっていく状況を示したのは意義深い点である。ただ、もう少し南齊・梁に考察を広げてみてもよかったのではないだろうか。特に士人との関係を持った尼僧がいたことに言及しながら、『比丘尼伝』中に南齊の文恵太子や竟陵文宣王と関わっていた尼僧が存在するにもかかわらず、全く触れられていないのは、不十分であろう。

全体として、もう少し考察を深めることが望ましい部分が見られる。例えば、第一章で北魏の慈慶尼の墓誌を取り上げているが、彼女が死後に比丘尼統を追贈されていることは、僧官制度研究の視点から見れば大変興味深い問題となりうる。しかしながら、本論では詳しく検討されていないのは、惜しまれる点である。この他にも、史料の内容により踏み込んで考察していくことで、さらなる論の展開が期待される部分があり、今後の課題となるであろう。

また、説明が十分でない部分も間々存在する。論証の過程で説明が不足しているがために、論者の考えが十分に伝わっておらず、もう少し推敲を重ね慎重に文章をまとめていく必要がある。

しかしながら、既に述べたように、先行研究が少なく、史料が限られている中、それらを網羅的に検討した上で、論者なりの新たな視点から考察が進められていることは、東晋～南北朝の尼僧研究の成果の一つとして評価できる。また、墓誌など興味深い内容を含む史料を蒐集しており、それらをより深く考察していくことによって、一層の研究の進展が期待される。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2016 年 12 月 26 日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、松岡智美に大谷大学博士（文学）の学位を授与する事が適当と判断した。